



### 玉山神学院との交流再開

校長 高柳富夫

二年間休止していた台湾・玉山神学院との交流を再開することができました。今回で八回目となります。これまで隔年で相互に学生交換交流をしてきましたが、玉山側と話し合い、これからは毎年互いにどちらかの学生を迎えて交流プログラムを行っていくことになりました。

今年には玉山から二人の学生を迎えました。レサ・ハネさん(タイヤル族)とカイヌワンさん(ルカイ族)のお二人です。七月八日に来日され、農伝での歓迎会、授業参加、北海道研修でのアイヌ民族との交流、仙台での被災地訪問と会津での農業体験、横浜寿町での青年ゼミ参加、靖国ツアール、小田原教会、番町教会、東京台湾教会での礼拝出席など、中身の濃い交流プログラム

ムを行い、八月五日に無事帰国されました。お二人のレポートを今号と次号に掲載します。

各地で快く迎えて意義深い交流をご準備くださった方々、通訳でご協力いただいた方々、とりわけ全体のコーディネイトとレポートの翻訳をしてくださった小田原教会牧師東のぞみさんに感謝いたします。

また、この度の交流のためにも多くの方々に献金のご支援をいただきましたことを、心より感謝しお礼を申し上げます。次号で会計報告をいたします。

これからも、神学教育をアジアの人々と教会との対話のなかで推し進めていく取り組みとして大切にしていきたいです。ご理解とご協力をよろしくお願いいたします。



### レサ・ハネ(タイヤル族)

はじめに、日本での実習の機会をお与え下さった神様に感謝したいと思えます。この実習によって、見知らぬ土地で異なる信仰観や生活習慣に触れ、私の視野はずいぶんと広がりました。今回は初めての海外旅行でしたが、素晴らしい経験となりました。

飛行機を降りてまず耳にしたのが日本語の「こんにちは」という挨拶の言葉でした。そしてこれが一ヶ月間で最も多く使う言葉となりました。初めからの印象として、日本人はとても礼儀正しく、何気ない挨拶の交わり方や動作の一つが慎ましいと感じました。

農村伝道神学校(以下「農伝」)に到着し、すぐにここが

好きになりました。木々に囲まれ、人間が大地と共にあるという実感を持てる素晴らしい環境だと思いました。私たちがの一ヶ月間の実習はこの学校から始まりました。

実は私はアレルギー体質のため、ここ十数年食べ物に気を配り、特定の食品、中でもシーフードを避けてきました。ところが、日本に来てシーフードをたくさん口にする機会がありました。せっかく日本に来たのだからと、あえて避けることはせずに過ごしてしまいましたら、意外なことに全くアレルギー反応が生まれませんでした。もしかしたらこの数年間で体質が改善したのかもしれないませんが、日本でたくさんシーフードを食べることができたのは私にとって実に不思議な体験でした。

一ヶ月間のプログラムは次のようなものでした。まず神学校で学生との交流、そして小田原の中学生との交流、教会の説教奉仕、アイヌ民族との文化交流、北海道の宣教師との交流、若い夫婦が営む農場の訪問、仙台被災地でボランティアアワークの体験、会津の放射能情報センターでの交流、寿地区の活動に参加等々：：でした。これは主なプログラムで、他にもたくさん交流や学びの時間が与えられまし

た。

農伝では中国語の授業に参加し、学生と交流できました。なぜ中国語に興味をもつのか尋ねたところ、「中国が好きで、太極拳に出会い、それによってより深く中国を知ることができた。しかしまだ足りないと感じ、今度は中国語を通して中国文化への理解をより深めたい」と思っている」という答えが返ってきました。私はこのお話に感動しました。彼女の学びに対する誠実な姿勢に私たちも倣うべきだと思いました。

北海道では、アイヌ民族の歴史についてお話をうかがいました。政治的事情により、南の小さな土地から侵略が始まり、とうとうアイヌ民族のすべての土地が奪われてしまったということでした。これを聞いて台湾の原住民として、私は身につまされる感じがしました。なぜなら日本政府はアイヌ民族を侵略した方法を用いて、台湾の原住民を侵略していったからです。しかし、私は日本に憎しみを抱くつもりはありません。苦しみを経ずして反省は得られませんが、台湾原住民は植民地支配の経験によって、多くの反省や新しい気づきを得ましたし、未来に向けてより建設的になれたと私は思っています。

ただ現在、この民主的な時代に於いて、台湾では原住民族が依然「植民地」として支配されている状況があり、多くの不義がはびこっています。アイヌ民族との出会いを通して、台湾の原住民族は悲観してもいられないと思います。アイヌ民族は日本政府にやっとな数年前に「日本の先住民族」とであると認められたところですが、目下の課題の一つが、アイヌ民族も台湾原住民族と同様に、各民族としてさらに細分化されるようですが、現状として十把一絡げに「アイヌ民族」と見なされているとのこと。ちなみに、台湾では原住民族が一四民族として細分化されそれぞれ認定されています。また、日本ではアイヌ民族文化は二つの資料館に収められ保護を受けていますが、残念なことに母語継承の危機にさらされているようです。ですが、幸いにも回復の試みがなされ、民族としての自覚と独立心が養われつつあり、これからの歩みが期待されているとのこと、それはとても喜ばしいと思いました。

このお話を聞きながら、人ごとではないと感じました。私たち三〇代のタイヤル民族は、生活環境の変化もあって母語を失いかけているのが現状だからです。このまま言葉

を失えば、アイヌ民族が直面しているように、高齢者でさえ母語を話せないという時代を迎えてしまうでしょう。幸いにして、先輩方が日常的に母語を使用しているため、その気になれば学ぶ環境はまだ残されています。私は改めて、母語を基礎から学びたいと思いました。

仙台の被災地では特別な経験をしました。去年、私もボランティアとして志願しましたが、人数オーバーで願いは叶いませんでした。しかし、偶然にも実習という機会を通して、わずかながらも協力することができたことは、私にとつて大変ありがたいことでした。津波被害がもつとも大きかったという海岸に立つと、ゆっくりと気持ち沈んでいくのを感じました。上を見上げると、死者を悼んで立てられた大きな彫像がありましたが、津波が一番高かった時は、この像と同じ高さにまで達したそうです。自然の力は大きく、人間は余りにも小さすぎます。福島の原発事故は日本のような先進国でさえ、事故を防ぐことも予測することさえできないことを実証しました。ですから、まして台湾が原発を安全に保有することなどできるはずもありません！台湾では未だ、人々の

目にはただ「電気」の問題だけがうつり、原発がなければ生活に支障が出る程度の理解です。しかし現実を知ったなら、便利さの代価が一体何であるかに気づくでしょう。この事故は台湾の人々も我がこととして受け止める必要があります。ただ賛成か反対かという単純な問題のように惑わされ、表面上の出来事だけで良い、悪いと判断を下すべきではないと思います。「原発とは何か？」という本質的な問題について、私たちは今、向き合わねばならないと思っています。

最後の訪問先として、寿地区で野宿している方々と交流できました。この地域の雰囲気は他とはどこか違い、生活の様子独特でした。特に一生忘れられないのが到着した



右端がレサさん

その晩のことです。シャワーに案内されると、路上に設置されたコイン式シャワールームで、百円で五分間シャワーが流れる仕組みでした。コインを入れて心で時間をはかりながら体を洗いましたが、時間を意識していたせいか五分間が非常に長く感じられました。思えば、この世はすべて神様のものです、自然のもは何でも当たり前に使って放題でした。以前は水など買う必要はありませんでしたが、今では水のためにお金を払い五分百円のシャワーを浴びています。では、これから先はどうなるのでしょうか？この新鮮な体験から、自分が自然の中で生かされており、資源を利用していることを改めて感じました。生態系を守るために多くの課題がある中で、自然と共に生きていくにはどうすればいいのか、改めて考えさせられました。

いま、たくさんの楽しい場所へ招かれ、楽しい経験をさせてもらったことを思い出しています。土地柄や人々の礼節に触れ、飲食を通じて、台湾との違いを実感しました。食事では、油を使う量がとても少ないと感じました。特に農家では自家栽培の作物が食卓に並び、とても健康的な食生活を送ってられます。日

本のこうした生活に憧れを抱くようになりまし。あらゆる経験をを通して多くを学ばせていただきましたが、全てを書き連ねることができないのを残念に思います。私たちが特別にこの地へ送り出し、学ばせて下さった神様に感謝しています。

私は将来、牧者としての歩みを始めますが、この旅行によつて大変重要なことを学びました。それは牧者は謙遜であれということ。今回、私たちを迎え入れて下さった牧師は、どなたもまるで友達のように私たちに接して下さいました。このことは今後の私の歩みの上で、ぜひ見たいことだと思っています。また、日本基督教団は台湾基督教長老教会とは異なる組織体制であり、合同教会として、様々な教派が連携して多岐にわたる活動を行っていることも、私には大変新鮮な出会いとなりました。

最後にもう一度、農村伝道神学校の校長とご家族、また私たちを助けて下さった通訳の方々、迎え入れて下さった皆様に感謝します。皆様の上に、神様の祝福がありますように。皆様の歩みの全てが、神様によつて支えられ、これからも豊かなものとなりますようお祈りしています。

# 第三四回 戦争責任シンポジウム

相原 聡

今回の戦争責任シンポジウムは、川崎戸手教会牧師の孫裕久先生に講演をしていただき、自分史を通して川崎戸手教会の歴史について話していただいた。

講演の中で「神の和解に参与するパートナー」という言葉が印象に残った。今回のテーマは「問われる人間人」であったが、話を聞きそれ自分たちが、どう向き合っていくのかを考えさせられた。

問う側、問われる側はあっても、そこには神の和解に共に参与するパートナーであるという認識が大切なのだという事。

しかし、人として問われるというのはつらいこと。だからそのつらさから逃げ出したくなり、自分も問う側に立ちたい心理が働くのだろう。ただ、そういう状況においても誰にでも立ち位置はあるので、そこに神の和解に参与するパートナーとしての意識をしっかりと持ち続けていきたい。

川崎戸手教会は戦責告白を實質化していこうとする教会として地域の中で活動をされている。昔は戸手地域には電



気、水道が通っていないかったため、住民たちは井戸を掘り、そこから各家庭へと供給をしていた。しかし、七〇年代にポンプ場が近くに建設されると、水道管が細く一斉に使うと、たちまち井戸の水が出にくくなったので市と話し合い水道管を拡大してもらえようになったそうである。生活をしていく中で、必要な水や電気といったものがあつて当たり前前に思っていたので、当時の様子を聞くと大変な苦労があつたのだということがわかった。また、スーパー堤防が建設される際にも、立ち退きの話で住民同士で話し合ったり国交省や市と交渉をされ

ていた様子は、地域の人々の暮らしを守っていく活動をして、教会が信頼を得ているように感じた。

地域の活動センターの行事として、高齢者サロンを毎週水曜日に民政委員の方やボランティアの方で始めるが最初は誰も来なかったのが、徐々に来てくれる方も増え、サロン会は一二年続いている。そして、このサロンに通っていてキリストのキの字も言わないう方が洗礼を受けられたりと本当に地域に根付き、地域に合った活動を行なっている。

今回の講演で、「戦争責任」「戦責告白」は、和解の営みに参与し、自分が何者かを自分自身が求めるものであるとい

## 沖繩教区諸教会問安報告

二〇一一年は福島、宮城、岩手、青森の諸教会。昨年は北海教区の諸教会。今夏は八月六日（火）から一二日（月）までの七日間、禿理事長と共に沖繩教区の卒業生、関係教会、施設を問安しました。

六日は那覇経由で石垣島に飛び、空港に小倉隆一牧師（平真教会、大浜伝道所）が迎えに来ていただきました。

その夜は、八重山中央教会牧師の増田陽一、一枝ご夫妻、

うこと。そして、そのことを考えながら、和解を継続していく事の大切さを学べた。

午後からの質疑応答の時に民衆神学の最終的な着地点は南北統一であるが、政治が結論をだす。しかし、どちらにも民衆がいるので、民衆レベルでの和解であり、血を流す戦争でなく「足元からの和解」が必要であるということ。この言葉は、参加者の心に響いたことであろう。その他にも色んな意見も出て有意義なものになったが、時間が足りなかったように思われた。

しかし、学生一人一人が改めて考えさせられ、今後の戦責シンポジウムについて考えていける内容であった

かつての農業研修科卒の田盛和夫、道代（保育科卒）ご夫妻が集まってくださり大いに話が花が咲きました。

七日は小倉牧師の勧めで西表島にフェリーで渡り、仲間川や由布島を観光。午後は八重山中央教会、平真教会、三つの保育園をご案内いただき、「ちいさな保育園」では保育科卒の大仲朝江さん、平真教会では小倉明子さんにお会いしました。明子さんがご用意く

ださった石垣のパイナップルは絶品でした。

八日はかつて農伝事務局長を務められた笹淵昭平、いづみご夫妻をお訪ねし、川平湾、平和記念資料館を訪ね、午後便で宮古島に飛びました。

宮古島ではまず宮古島伝道所をお訪ねしました。伝道所入り口右のフェンスには、日本国憲法九条が大きく掲げられ、昨年暮れに召された星野勉牧師の二〇年に及ぶ宮古島の鮮明な宣教姿勢が偲ばれました。

九日は沖繩島へ。宿泊先は宜野湾セミナーハウス。

一〇日は、知花正勝牧師のご案内で兼子教会の村上キクさん（村上仁賢牧師夫人）をお訪ねし、本部港から伊江島へ渡り、阿波根昌鴻さんの反戦平和資料館を訪ね、謝花悦子さんのお話をしばし伺いました。「この沖繩の現況をヤマトはどうするのですか」との厳しい問いかけを受けました。一日は日曜日。禿さんは与勝教会の礼拝で説教奉仕。私は首里教会の礼拝に出席し、教区議長竹花和成牧師と教会の皆さんにご挨拶させていただきました。その夜、久保礼子さん（よきサマリア人伝道所牧師）と西尾市郎さん（うるま伝道所牧師）のご提案で、講演会（テ

「マは「越境の神学」と懇談の時を持つことができました。農伝関係者の枠を越えて三五名もの方たちが集まってくたさり、良い集会を持つことができ、農伝の現状や課題、神学教育の方向性や教会の在り方を巡って、アピールと意見交換をすることができ、とても有意義でした。保育科卒の上原靖子さん、上間民子さんにもお会いできました。沖繩教区を支えて来られた方々が集まってくたさり、農伝に対する期待と励ましを実感しました。

予想に反して台風接近の心配もなく、内地と同じく猛暑の中でも、極めて安定した天候に恵まれ、予定通り帰って来ることができました。宜野座での米軍ヘリ墜落事故のせいでオスプレイの飛行訓練も中断しており、沖繩を離れる一二日に岩国からの追加配備を再開するということが、複雑な思いですが、これまで訪れた中ではいつになく静かな沖繩島を経験して参りました。

(校長 高柳富夫)

◆六月一八日(火) 学報一四九号、学校案内(二〇一三年)、後援会だよりを発行した。

- ◆七月一日(月)・三日(水) 神学校同窓会(おごと温泉)
- ◆七月四日(木)・五日(金) 修養会を神学校で行った。
- ◆七月八日・八月五日(金) 「霊性とキリスト教、禅とキリスト教」
- ◆七月九日(火) 農伝にて台湾からの交流学生歓迎会開催
- ◆七月二三日(火)・二六日(金) 集中講義・日本宗教史(講師:戒能信生氏)
- ◆八月六日(火)・一二日(月) 校長は理事長と沖繩方面間集中講義・牧会心理学(講師:大西秀樹氏、石田真弓氏)

—— 2014年度入学案内 ——

■教育目標

- ・農村・地方教会に仕える牧師・信徒伝道者を養成します。そのため現場、農業実習、共同生活を大切にします。
- ・貧困・差別・人権という諸問題を神学の課題とします。
- ・戦争責任を明確にしアジアの人々と教会との対話の中で神学教育を行います。

- 受験資格
- ①日本基督教団に限らずプロテスタント教会に所属し、原則として受洗後1年以上(洗礼式を行わない教派に関しては、それに準ずるもの)の教会生活をしていること。
  - ②牧師・信徒伝道者となる召命を受け、所属教会が推薦すること。
- 修業年限 4年
- 入学試験
- 第1回 2013年11月20日(水)  
第2回 2014年2月26日(水)
- 入学試験科目
- (1) 小論文 (2) 新約聖書・旧約聖書 (3) 面接
- ・学校案内・入学願書・過去の試験問題等は神学校事務室まで請求下さい。
- ※ 学校見学・体験入学  
希望する方は事務室に申し出下さい。授業参加、食堂の昼食、教師との面談をすることができます。

- ◆九月二六日(木)・二七日(金) 集中講義・農村伝道論(講師:星野正興氏)
- ◆夏期実習は三人が履修した。
- ・竹花牧人(水口教会)
- ・小手川到(部落解放センター)
- ・沼田弘行(寿地区センター)
- ◆神学校日には次の教会から依頼があり、学生、教師を派遣する。
- 埼玉和光教会、六角橋教会、上大岡教会、鶴川北教会、まぶね教会、小金井教会、三鷹教会、上星川教会、鶴川教会、大泉教会、城西教会

幼稚園長および主任の任期との関連で、今後の体制について協議を重ねている。神学校研修棟のトイレ改修工事について二社から見積もりを取り、校舎新築工事を担当した三元建設に発注した。理事長は神学校校長とともに、沖繩諸教会と卒業生を問安した。(書記 横野朝彦)

**お知らせ**

◎農伝デー(農村伝道神学校オープンキャンパス)  
日時:二〇一三年一〇月一日(土) 午前一〇時・午後二時  
雨天時は一週間順延

・記念講演会:「ストーン牧師と農村伝道神学校」  
講師:本田栄一氏(本校講師)  
午前一〇時三〇分より

◎今年度特別講義  
日時:一二月一〇日(火)・一三日(木)

講師:上村静氏  
日時:一二月一四日(金)

テーマ:『キリスト教の成立と反ユダヤ主義』

講師:佐藤研氏  
公開としますので、聴講ご希望の方は事務室までお申し込みください。一日につき三千円。

なお昼食ご希望の方は、お弁当を申し込むことができます(五百円)。

礼拝堂にて(入場無料)  
交流タイム・軽食・喫茶、物販売、後援会コーナーなど  
・入学や学内見学ご希望のかたは、ご案内いたします。

農村伝道神学校  
〒195-0063 東京都町田市野津田町 2024  
Tel 042-735-5775 Fax 042-735-5711  
Eメール: noden@pony.ocn.ne.jp  
ホームページ: http://www11.ocn.ne.jp/~noden/  
振替番号  
農村伝道神学校 00160-6-18485  
農村伝道神学校後援会 00120-6-24418